

トレイルランナーの環境意識 ～スポーツと社会の関係を反映～

後藤新弥（江戸川大学経営社会学科教授）

KW： トレラン 環境破壊 登山 社会

研究調査の主旨

近年、野山を走るトレイルランニングが市民スポーツの人気種目として注目され始めた。整備された道路を走るフルマラソンやジョギングに対し、こちらは登山道など、自然の中の不整路を走り抜ける点が新たな魅力になっている。一方、全国的な統一組織がない自由なスポーツであるため、一般登山者へのマナーに欠けるランナーもいて、①危険である ②環境破壊につながる、等の理由で、「トレラン規制」が始まり、逆風となっている。果たしてランナー、あるいは登山者はどのように感じているのか。現場で実態調査を行った。

調査方法

調査は千葉県鋸山での房総丘陵トレランレース（2015年3月8日）、つくば山登山道アンケート調査（同5月9日）などで対面形式で回答を求めたもので、ランナー32人、登山者33人の回答を得た。調査結果の集計（抜粋）表を末尾に記載する。

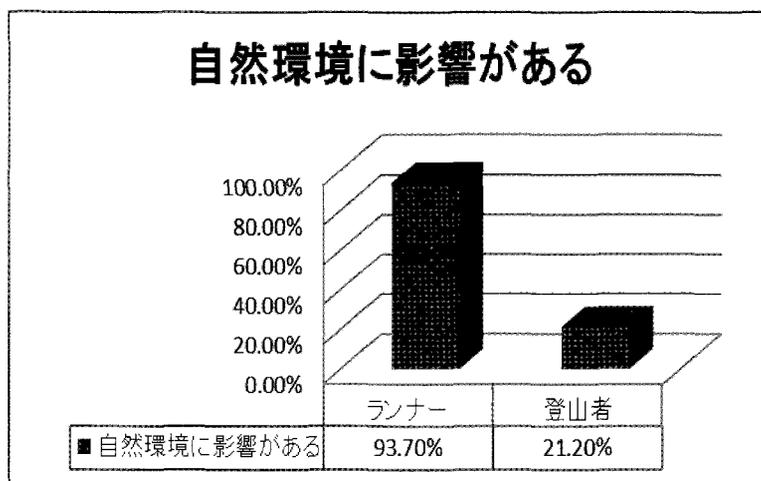
環境問題

トレイルランナーが山道を踏み荒らしたり、野鳥を驚かせたり、ゴミをまき散らすなどして、環境を破壊するのではないかと、との設問に対し、

ランナーの93.7%が「自然への影響が全くないとは言えない」「だから環境保全に配慮している」（コースを外れないなど）と回答した。これに対して登山者は「トレラン

は環境にダメージを与える」と断定的に考えている人は21.2%に留まった。ランナー自身の方が、環境破壊への危機感をはるかに高かった。

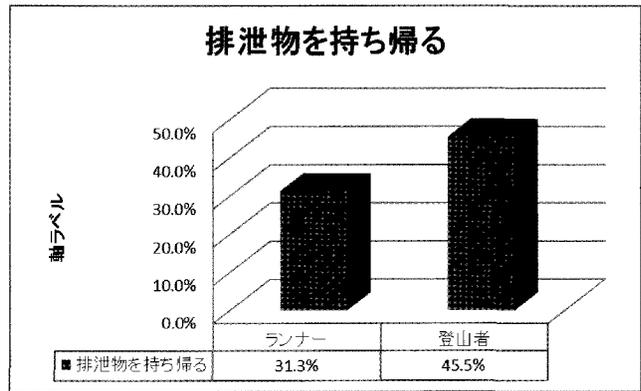
事実、ランナーの31.3%が、「むしろ一般登山者の方がゴミを捨てるなど環境に対する意識が低いと思う」と回答した。登山者側では「登山者も環境に配慮すべきだと思うか」に同意したのは半数以下、45.5%だった。



ただし、競技中や連続走行中は
便意も少ないこともあり、ランナ
ーはあまり排便の機会がない。

「排泄物を持ち帰るか」(うんこ
をコンビニ袋などに入れて持ち帰
る)の問いに対してはイエスが3
1・3%に留まった。

用便の機会が比較的多い登山者
は45・5%と、数値上は登山者
の方が高得点をマークした。



マナーについて

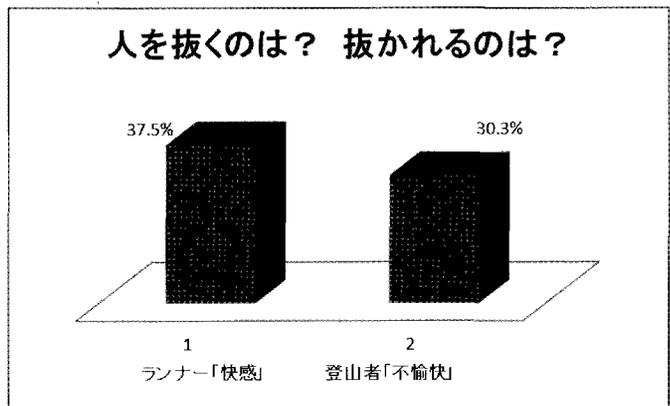
ここでは、自然環境より人的な心理環境への影響を調査した。

登山者の側では「トレランは別に気にならない」という人が42・4%だった。裏を返せば、約6割がやはり若干なりとも迷惑や不愉快、危険などの“違和感”を感じている。

現実に「不愉快に感じたことがある」は27・3%だった。「危険を感じた」のは9・1%に過ぎず、安全面より心理的な影響の方が今後の大きな課題であることが分かった。

ランナーの側としては「抜く時は一声かける」が100%、「すれ違い時にはこちらが止まる」が81・3%と、マナーに対しても高い意識を回答、「登山者の迷惑にならないよう配慮している」が93・8%だった。これに対して登山者側は「好感度の高いランナーもいる」に50%がイエスと答えている。トレランが必ずしも登山者と敵対関係にあるわけではないことが推測された。

しかし、本音の部分で、登山者の「見てよ、この颯爽とした姿を」といったノリのランナーには27・3%が不快を感じると回答した。ランナーの意識調査では、「正直、見せたい、見て欲しい気持がある」がわずか6・3%だった。あえて混雑した街中を走るランナーに眉をひそめる人は多いが、ごく一部の「見せたがり」走者に対しては、同等の嫌悪感が存在していることになる。



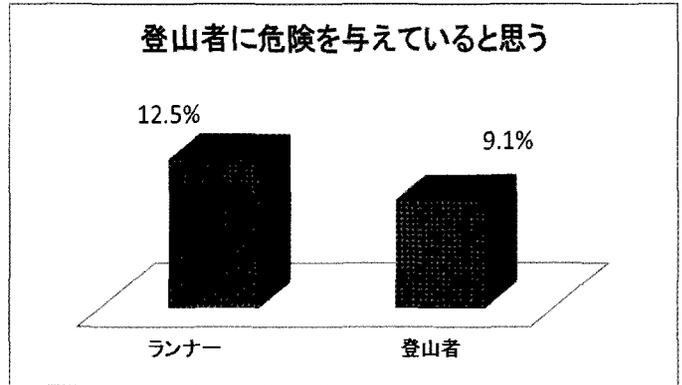
なお、ランナーの調査では「相手がランナーであれ登山者であれ、やはり人を抜くのは快感である」に37・5%が同意を示した。登山者に聞くと「抜かれるのは不愉快である」が30・3%相当だった。奇しくも同じような割合となったが、実際に登山指導者らに聞くと、「登山者こそ相手を問わず、抜かれることに抵抗を感じる割合はもっと多いかもしれない。実は登山者にはかなり激しい競争意識が存在し、それが高齢者登山の事故多発の背

景にもなっている」(IC I石井スポーツ登山本店越谷英雄氏=アウトドアコーディネーター) そうだ。

いわば心の闇。「トレラン対登山」の背景にある心理的な葛藤がここでも垣間見られた。

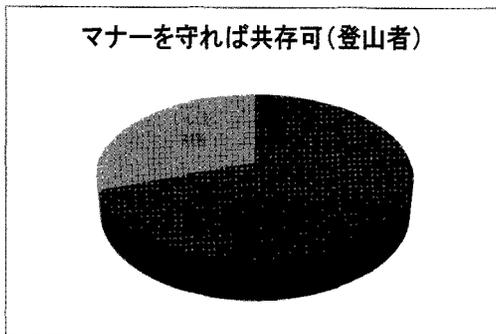
考察

トレランは自然環境にダメージを与えるとの日本野鳥の会などの声を取り上げ、2015年4月、環境省は国立公園内では、「一般利用者の安全で快適な利用の妨げとなるので、利用者数の多いルートでの混雑期などは原則として大会などを禁止する」指針を出し、一部では条例化を求める声も多く上がっている。



しかし現実には、物理的な自然環境破壊や登山者への安全ではなく、登山者への“人的(心理的)な環境破壊”がより大きな課題ではないだろうか。

では、行政指導のように、トレランは人の多い人気登山道などからはから閉め出すべきだろうか。登山者に率直に聞いてみた。「人の多い登山道は遠慮して欲しい」は21.2%



に過ぎなかった。もっと強硬な「閉め出すべきだ」という意見に賛同した人は皆無(0%)であったことは注目すべきだろう。そして「マナーを守ってくれればトレイルランナーと共存できるはず」が7割近い、69.7%にも達した。この“マナーを守る”には、単なる物理的な自然環境への配慮だけでなく、多分に「心理的な好感度」を求める部分が大きいことは、ここまでの調査で明らかだ。

ランナー側は、「追い抜くときは声をかける」「行き違う時は立ち止まる」などの交通のマナーにある程度配慮している人が予想以上に多いが、「だれであれ抜かれるのはいやだ」「見てよ、颯爽としたこの姿、という雰囲気嫌い」といった、登山者心理の奥底にも、もっと配慮していく課題が残されている。

この「マナー問題」は、街中を走るジョガー(マラソンランナー)に共通する部分がある。皇居の周りがジョガーのメッカとなっているが、地元千代田区のアンケート調査(2014年)では危険を感じたことがあると答えた人が半数以上の54%に達した。「孫がランナーにぶつかってケガをした。区内の入浴施設でもランナーが多くマナーが悪い」などがその理由だが、市民ランナーの代表格で自身も皇居周りを走る谷川真理さんは「危険と言うより、自分より遅いジョガーや歩行者に対して“邪魔だ、どいて”といった我が物顔

で走る人が部分的にいて、そうした人たちが印象を悪くしているのが実情では」(インタビュー取材)と話している。

またスポーツ教育学の専門家・遠藤大哉氏(NPOバディ冒険団主宰)は「マスコミにも責任がある。スポーツは経済的にも社会の支援を受けて成り立つもので、スポーツする人がしない人より“偉い”わけではない。マスコミや企業が市民スポーツ活動を後押しすることは有意義だが、普及のために“礼賛”しすぎると、ランナー達の社会的な意識が損なわれ、気負い立った“特権意識”を持つ人も出てくるのではないか。逆に、トレランをすることで、自然環境だけでなく、他人の心理への配慮といった社会的な意識が高まるようになることが理想。過渡期の現在、非常に微妙な分岐点に立っているとと言える」と指摘している。

確かに「趣味を行う際には他人迷惑をかけない」という基本的な道德観念が、近年の日本ではかけ始めている、そうした風潮を、トレラン問題も反映していると言えるだろう。

背景の課題

今回の調査でもう一つ浮かび上がったのが、大会のあり方だった。トレランの形態は、①地元ぐるみの公の大会②商業イベントとしての大会③指導者などが引率する集団走行④各個人の自由な走りの4つに分類される。このうち、①④のランナーについては、今回の調査結果に近い意識が推測されるが、②の「イベントを商売とする“業者”が、地元とは見開係に開催する大会」では、大会側に環境への意識が欠けている場合も多く見られ、また自称指導者などが率いるグループ走(③)では、高揚したムードの中でつい登山者への配慮を忘れる、といったケースが目立っていることが、インタビューで明らかになった。

トレランの全国組織には、主催者の競技会「日本トレイル会議」(日本山岳会トレラン小委員会)などがあるが、ランナーを統括する組織はない。それが「市民スポーツ」トレランのよい点でもあるが、それだけに、自主的な「物理的・人的環境破壊」への配慮の高まりが今後いっそう求められていくだろう。

ランナーアンケート集計結果抜粋		登山者アンケート集計結果抜粋	
<環境意識について>			
環境への影響はない	6.3%	環境にダメージがある	21.2%
登山者こそ無頓着	31.3%	登山者も環境配慮を	45.5%
清掃登山に参加している	31.3%	清掃登山などに参加する	0.0%
排泄物を持ち帰る	31.3%	排泄物持ち帰る	45.5%
<危険か>			
登山者に危険を与えていない	12.5%	危険を感じたことがある	9.1%
<マナー>			
マナーの悪いランナーはいない	50.0%	好感のランナーもいる	33.3%
声をかけて追い抜く	100.0%	トレランは気にならない	42.4%
こちらが止まって行き違う	81.3%	不愉快なことがある	27.3%
<心理>			
見せたい、気持はある	6.3%	「見てよ」には嫌悪感	27.3%
人を抜くのはやはり快感	37.5%	抜かれるのは不愉快	30.3%
野山はそれほど弱くない	18.8%	マナーを守れば共存可	69.7%
配慮している	93.8%	登山道から閉め出せ	0.0%
		登山人気の時場所は遠慮を	21.2%